

りのぞきました。そして外地からの引き揚げ船として最後の使命をはたすことになりました。

—すべての火器弾薬を撤去されますと、身軽で行動が自由になりましたのでしよう。輸送人員は何人ぐらいいできましたか。

おおむね三百人ぐらいを一度に乗せて帰りました。フィリピンのミンダナオ島のダバオの在留邦人の引き揚げで、おもに婦女子でした。その時現地の港で驚きました。米軍の自動車に日本人を乗せてきて、そのまま海に乗り入れ本艦に横づけにして人の乗降をするのです。本当にびっくりしました。水陸両用の自動車だったのです。

—日本軍とは武器も機械もすべて雲泥の差がありますね。

艦の油が不足したので、アメリカの船から燃料をもらって帰りましたが、対空対潜等の警戒もなしで海上航路をドンドン走って帰り、鹿児島湾にはいり、引き揚げ者を上陸させました。皆さんの顔が、ヤレヤレとあんだのいろでした。私も気持がスカッとしました。

—引き揚げ船はそれからもずっとやられましたか。

私は長男ですから帰れといわれていました。陸路呉の海兵団へいって、復員の許可をもらって、昭和二十年十一月三十日自宅の門をくぐりました。

—実役二年八か月の任務を終わらせて帰られた時の気持は、当時の外地にあった人は皆同一でしょう。

誠に貴重なお話を発表してくださいましてありがとうございます。ございました。

海軍航空隊員従軍よもやま話

福島県 物井 與太郎

(旧姓佐々木)

私は帝国海軍軍人として、昭和十八年十月一日横須賀第一海兵団へ二十四歳で召集され入隊しました。

昭和二十一年十二月復員、名古屋港へ上陸するまでの間(軍隊の最終の階級は上等水兵)主として比島地域において体験した大東亜戦の従軍のよもやま話を致します。

横須賀第一海兵団へ入隊後十二日間は隊内で新兵教育を受け、ただちに十月十三日に館山第二海兵団へ転属を命ぜられ、約三か月間養成訓練を受けました。

昭和十九年一月、木更津航空隊基地部隊（鷗部隊）―十六重爆機―銀河―部隊の整備兵として転属した。これより戦地部隊となりました。

昭和十九年四月、横須賀港よりハワイ攻撃の目的で出港、十六隻の船団でした。途中バシー海峡で敵潜の攻撃を受けて十三隻が沈没し、翌朝残ったのはわずかの三隻のみ。

台湾へ寄港したのち、フィリピン・ミンダナオ島西南部のザンボアンガへ上陸し、二十年三月ごろまで同地にいた。毎日戦闘を繰り返しながらジャングル行軍をした。

敵は米軍と地元ゲリラの連合軍で、これと日本軍の小兵器による交戦でした。

当初、ザンボアンガには、日本兵力は陸海軍あわせて約三千人いたが、大部隊ではだめなので、小部隊に分散して目的地のダバオへ向けて分進した。このジャングル

行軍はひどいもので、磁石をたよりに前述のような小戦闘をしながら、当初五十人の兵力が終わりには四人にへっていたという、損害のひどさでした。

原因は戦闘による負傷よりも餓死が多かった。木、草の葉、根、その他あらゆるものを口へ入れて、栄養失調の身に鞭打って、ヒョロヒョロしながら前進したが、夜駐屯して朝出発する時には毎日一割が死亡していた。死体は焼けないのでうめた。

白兵戦も多く、焼畑農地のあとのかやの草原（身のたけをこす高さのかやの草原）で敵、味方いりみだれて戦ったものだ。二十ミリ機銃を三十発うったら、すぐ移動せぬとぎやくに敵の集中行軍を受ける。そのため射手は消耗品で副射手二人がついていた。このような苦しい状況下で、自分は必ず生きることを決心して、さいわいに生きのびることが出来た。私の戦場における経験をい

うと

第一番目は 全身がたがたふるえる

第二番目は 銃をうちだすと度胸がつく

第三番目は 一年たつと戦場なれしてくる。敵がどの

方向、距離、兵力等がわかりだした。

敵の銃の射撃音のある間は大丈夫、必ずその間敵は移動して近いところから攻めてきた。二十年の八月までは物すごい攻撃をされた。その間空腹でたまらなかった。

「腹一杯食べられたらもう死んでもよい」

という戦友もいた。バナナ畑でバナナをみながら撃たれて戦死した人も多い。

二十一年三月カガヤン（ミンダナオ島北部中央）で武装解除を受けた。さらにレイテ島へ移った。三か月間は炊事勤務をしていたので、食物の不自由はなかった。

比島語とスペイン語に少しなれて通訳のまねもした。

三井の石炭の山より港まで二十キロのレールが敷かれており原住民の親日気分良好でいろいろとよかった。別れて帰る時には餞別までくれたほどであった。

二十年八月ごろは、まだ終戦を知らなかった。民兵が攻めてこなくなり、不思議に思った。ぎやくに相手は銃を取りあげられたので、日本兵をみると逃げて行った。

そのうちにカガヤンで武装解除されてレイテ島の収容所へ移った。二十一年六月頃から二十一年十二月までカ

ガヤンに三千人ぐらい、レイテ島の収容所三か所で二人（軍人と軍属あわせて）いた。レイテよりの日本人引揚者は十六万八千人、引揚船は二十一年三月で打ち切り、最後の船の二千人の一員として名古屋港へ帰国上陸した。

引揚船は米軍上陸用舟艇で一隻に一千人ぐらい乗った。

レイテより約一千人がマニラへ移された。戦犯者である。自分（当時佐々木、戦後物井と改姓）は戦犯の組にはいなかった。佐藤、鈴木、等Sの同姓の人が多かった。現住民が「ユー」といって指さすと駄目。自分は助かって帰った。名古屋の引揚船の収容所へ一泊して帰省した。

従軍の期間を振り返ってみると、武装解除後は物資に恵まれて殿様生活であった。また病気に苦しむことがなかった幸運にも恵まれた。

しかし最も苦しい思い出は、第一に食料難、第二に多数の戦友の死亡であり、第三には人間の野性化であった。

「空腹がつつてくると口のなかより焰が出る。」

これは経験のない人には理解してもらえない。

復員後は会津若松の養母のもとへ帰って、会津漆器の塗師となり生活した。

海軍志願兵の思い出話

茨城県 大山 松重

私は帝国海軍軍人として、昭和十六年五月一日横須賀第一海兵団へ志願、入隊しました。その当時、私の家庭の状態は、家業は農業で家族は父、母、兄二人、私、弟一人、妹一人の七人家族で、全員健康であり、農業は中流の規模で田畑あわせて約五町歩、生産品は主として米、粟でありました。

当時の世相として、若い男子が早く軍人となって国家のために戦争にでることを奨励する運動が盛んであったので、家庭の状態から考えて、私が一人軍隊へはいることはゆるされる条件であった。まだ十六歳の少年が勇躍

入隊、四等機関兵が生まれました。

昭和十六年五月一日、海兵団入隊後、四か月間を、横須賀で新兵教育で過ごし、九月より支那方面艦隊（上海にいた）へ配属され、特設砲艦「第一〇雲海丸」に乗船、支那方面沿岸、杭州湾の舟山列島の警備につきました。

毎日の業務は機関の釜たき兵で石炭の投入です。たいへんきつい仕事で、夏は四十度の酷暑ですから、重曹水をわきへ置いて頑張りました。勤務は四時間こうたい、一日二回勤務、三こうたいでした。勤務外の時間は洗濯、甲板掃除等で休む間もなく、目のまわるような忙しい毎日でした。

大東亜戦争へ突入するや、艦内にも緊張のどあいが強まり、昭和十七年一月玉環島へ敵前上陸をしました。七・七ミリ機銃の弾丸一千発を背中へおい、胴の前後に百八十発を携帯し、重い荷物で身の自由もできないぐらいでした。

上陸用舟艇にいじょうし、煙幕を張り、重い弾薬を背負い、目指す島へと向かう時の気持はさすがに軍人とはいえ、（新兵として）なんともいえないものでありまし